慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	春の寿ぎ
Sub Title	The celebration in spring
Author	下村, 裕(Shimomura, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2016
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.137 (2016. 2) ,p.331- 334
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000137-0331

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

春の寿ぎ

下　村　　裕

この春，本塾法学部日吉所属の三先生が定年退職の日をお迎えになる。英語部会の久我俊二先生，自然科学部会の秋山豊子先生，ドイツ語部会の岩下眞好先生である。長きに亘り，研究と教育活動に従事され，また本学部や塾の重要な公務を果たされた。ここに各先生の略歴と専門を少しばかり紹介し，ご功労への敬意と感謝とするとともに，本学部を「ご卒業」されることを心よりお祝いする。

*

久我俊二先生は 1951 年生まれ。1974 年に早稲田大学（旧）第一文学部卒業後，本塾大学院文学研究科に進学，1977 年修士課程修了，1980 年博士課程を単位取得退学された。大学院では英米文学科の安東伸介先生の薫陶を受けられる。また西脇順三郎先生の授業を受け，お酒もご一緒できて幸せに感じられたとのこと。1977 年に本塾大学法学部に助手として奉職され，専任講師，助教授，教授へ昇進された。その後，法学部では学習指導主任・副主任を歴任され，合わせて 15 年くらいお務めになった。久我先生ほどその知識・経験をお持ちの方はいまだに生まれていない。2008 年に旧外国語学校の校長に着任され，ご在任中に専門学校という形態を廃止し外国語教育研究センターの一部門として再出発する道筋をつけられた。

ご専門は，久我先生を法学部に招かれた海野厚先生の影響もあって，最初は D・H・ロレンス（20 世紀前半のイギリスの小説家・詩人）。その後，ほぼ同時代に生きたジョセフ・コンラッド（ポーランド生まれのイギリスの作家）の研究をさ

れ，さらには，コンラッドの友人のスティーヴン・クレイン（アメリカの小説家・詩人・ジャーナリスト・短命で 1881 年～1900 年）にご転向。実際，コンラッド（Conrad）とクレイン（Crane）は，本屋でアルファベット順に陳列されていると並んでいるので，不思議な縁を感じられた。クレインについては，アメリカのスティーヴン・クレイン協会で活躍する第一人者のアメリカ人研究者たちと，直接やりとり出来る実力者。その一連のお仕事の集大成ともいえるご高著『スティーヴン・クレインの「全」作品解説』により，平成 27 年度義塾賞を受賞されたことは記憶に新しい。またクレインの友人で，同じくアメリカからイギリスに渡った，ハロルド・フレデリック（小説家であると同時にニューヨーク・タイムズのロンドン支局長・ジャーナリスト）の日本での紹介（評論・翻訳）などもされてきた。

ジーパンとジャケットの似合う，いつまでも若々しい先生である。

*

秋山豊子先生は 1950 年生まれ。1974 年に埼玉大学理工学部卒業後，東京教育大学大学院理学研究科動物学専攻の修士課程に進学・修了。1976 年に筑波大学大学院生物科学研究科博士課程に入学後，在学中の 1977 年に生物学担当の助手として本塾大学法学部に着任された。在職中の 1987 年には筑波大学より博士の学位を取得されている。その後，専任講師，助教授，教授に昇進され，日吉 ITC 所長，日吉紀要刊行委員長，自然科学部門主査等を歴任された。

日吉第二校舎にある生物学教室では主として烏骨鶏を材料とした鳥類色素細胞の研究に取り組まれ，国内外の学会で Best Poster Award を受賞されるのみならず，日本色素細胞学会や International Federation of Pigment Cell Societies の理事を務められるなど，学会運営にも深く関与された。

先生の授業内容は Science 誌の記事（Vol.317, No.5834, p.77）にも取り上げられ，先生は“Shoulder-high even to most of her female students, with a ready smile and quiet demeanor”と紹介されている。授業内容のみならず笑みを絶やさないお人柄が多くの学生を惹きつけ，いずれのクラスも履修希望の学生であふれていた。先

生の教育への情熱はこれにとどまらず，西表島・真鶴・蓼科などで直接自然に触れる体験学習に一貫校の生徒を含めた多数の学生を引率され，塾全体の自然科学教育に尽力された。

ここで紹介した研究・教育のご様子だけでも先生のパワフルさはあきらかであるが，お仕事以外でも，ご趣味は登山で深田久弥の百名山を完登されたと聞き及んでいる。ご退職後もこのパワーはそう簡単に衰えることはないと拝察するところであり，更なる登山記録を打ち立てられることであろう。

*

岩下眞好先生は 1951 年生まれ。本塾の法学部政治学科を 1973 年に卒業後，大学院文学研究科に進学，1979 年博士課程を単位取得退学され，同年に法学部専任講師に着任された。そして，助教授，教授へと昇進された。ご研究の傍ら，学習指導副主任，学生部委員などをお務めになり，通信教育にもご尽力された。

岩下先生のご専門は，23 歳で夭逝したゲオルク・ビューヒナーである。いや，だったと言うべきか。ビューヒナーはドイツ文学史上稀有の天才だが，短命だったため作品は少ない。一生の相手に足りず，なのか，先生のご関心は多方面に向けられ，特に音楽評論家としてのご活躍は周知の通り。

岩下先生は原文の意味を緻密に読み取る翻訳の手練れと称される。特に，20 世紀のオーストリアを代表する作家トーマス・ベルンハルトの作品を本格的に日本に紹介した功績は大きい。ベルンハルトは世の趨勢に迎合しない反抗的な作家として知られた。またビューヒナーも革命を待望した作家だった。かような文学者に興味を持たれたのは，反骨の精神という点で共振するものがあったからか。昭和天皇崩御の折，日本中が暗鬱な自粛ムードで覆われる中，あえて真っ赤なセーターを着て授業をしたというエピソードは，当時学生の間で有名だった。

先生の語り口はもっぱらオーストリア風である。つまり，穏やかで，社交的で，無用な喧嘩を避け，相手がこちらの真意に気づくのを待つ。これを賢いと

も，人が悪いとも言うが，こうした交渉術ゆえ，店じまいをしていた飲食店が深夜再び開くというささやかな奇跡も起きる。そういう場所で，文学や芸術を語る夢が紡がれ，学生たちは目を輝かせるのだった。

2004 年に私がウィーンを訪れた際，エントロピーの意味を明らかにした大物理学者ルートヴィッヒ・ボルツマンの墓に偶然遭遇するという幸運に恵まれた。滞在していたホテルに地の利があったおかげであるが，そのホテルは岩下先生にご紹介いただいたものであった。遅まきながらこの場を借りて御礼申し上げる。